歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。

このほど、牛耕用の各種の唐鋤や鞍、脱穀機など、多数の農機具を籔上喜代一様（豊田）から、また、商用天秤棒やコモ編み具などを篤志者様から寄贈いただきました。紙面をお借りして、御礼申し上げます。

戦前の日野の商工業
―引札と福助人形―

日野地方は、室町時代に旧日野町が中野城の城下であったことや、現日野町全域が、江戸時代初期以来、多くの日野商人を生み出した地域であったため、滋賀県下でも、早くから商工業が栄えていた有数の地域でした。

その伝統は、明治時代以降にも引き継がれ、明治四十三（一九一〇）年二月二十日には、「日野商工会」の設立総会が開かれています。その様子を地元新聞の『日渓時報』は、次の様に報じています。

（前略）創立総会を開会せられたるに日野町（旧日野町）の商工業者五百四十余名にて　会するもの三百余名の過半数に達したれば（下略）

日野商工会が組織された背景には商工業者の増加があり、大正二（一九一三）年に一二一四名、昭和五（一九三〇）年には一二九六名もの加入者を記録しています。

近江日野商人館では、明治時代初期から戦前までの現日野町域で開店された商店を調査し、現在までに約一〇〇〇店近くの店を確認しています。もちろん、これらの商店が同時に存在していたのではありませんが、これらの商店の所在地や主要販売商品などの一覧表を、商人館二階展示室に常設展示していますので、ご覧ください。

このような、日野地方の商店の繁栄ぶりを今に伝えるものとして、引札や福助人形があります。

引札は、戦前の商店から発行された広告で、「絵ビラ」とも言います。木版や石版を使った「天然色」（色刷り）のきれいな版画で、江戸時代以来の錦絵（浮世絵）の伝統を引く日本独特の美術品として、海外でも知られています。

京都や大阪の専門業者が引札の図柄集を作製し、そこから気に入った図柄を商店主が選び、それに業種や商品名、商店名などを刷ってもらって増刷し、多くのお得意さんに配布しました。

図柄には、富の象徴である大黒天や福助・戎さんをはじめ、あでやかな美人画、時代を反映する軍人もの、汽車や自転車・自動車・飛行船などのハイカラ文明もの、カレンダー、列車時刻表など、人々の注目を引く題材が選ばれ、現在の広告ビラよりもはるかに品格のある内容となっています。

それだけに、天然色の引札を手に入れた人々は、おめでたい図柄にあやかりたいと、正月に枕の下に敷いて寝たり、襖や小物入れに張ったり、タンスの底にしまったりと、引札を大切にしました。

また、戦前の商店の店先を飾ったものに、福助人形があります。

日野地方の戦前の商店では、どこの店でも福助人形が飾られていたと伝えられています。

近江日野商人館では、新春の企画展に、「景気回復　福助サミット展」と題して、日野町内の福助人形を多く展示する予定です。皆さんが所有しておられる店先用や貯金箱用などの福助人形を、ぜひとも福助サミットに参加させてください。人形だけでなく、福助の図柄なら何でもけっこうです。

なお、人気の高い引札は、一月五日からの福助展でも、本物と写真合わせて約百六十点を再展示します。ぜひ、ご覧ください。

▲おめでたい図柄の引札

E-mail hino-syounin@rmc.ne.jp